シリーズ「遺跡を学ぶ」——040

中世瀬戸内の港町

草戸千軒町遺跡〈改訂版〉

鈴木康之

新泉社

中世瀬戸内の港町
―草戸千軒町遺跡（改訂版）―

鈴木康之

【目次】

第1章　伝説の町の発見……4
1　幻の町・草戸千軒……4
2　川底の遺跡……10
3　中州を掘りあげる……13

第2章　中世の町を掘る……16
1　集落成立以前……16
2　中世集落の成立（一三世紀中頃～後半）……22
3　町の発展と停滞（一四世紀前半）……26
4　町の再開発（一五世紀前半～後半）……30
5　町の終焉（一五世紀末～一六世紀初頭）……36

第3章　人びとの暮らし……43
1　活発な流通網……43
2　木簡が語る経済活動……53
3　人びとの生業……56
4　暮らしのなかの道具……63
5　伝統文化の形成……71

第4章　内陸と瀬戸内をつなぐ町……75
1　古代の芦田川河口地域……75
2　草戸千軒の古地名……78
3　中世福山湾沿岸の復元……82

第5章　よみがえる「草戸千軒」……87

編集委員
勅使河原彰（代表）
小野　昭
小野　正敏
石川日出志
小澤　毅
佐々木憲一

装　幀　新谷雅宣
本文図版　松澤利絵

第1章　伝説の町の発見

1　幻の町・草戸千軒

幻の町

瀬戸内海沿岸のほぼ中央に位置する広島県福山市（図1）では、かつて市街地を流れる芦田川がたびたび氾濫し、被害をこうむっていた。とくに一九一九年（大正八）七月には、福山市街の中心部で堤防が決壊し、市街地の大部分が七日間にわたって浸水するという甚大な被害をもたらしていた。

こうした事態を解消するため、それまでおもに耕作地として利用されていた市街地の西側に川の流れをつけ替える治水工事が進められた。そして、工事中の一九三〇年（昭和五）、河川予定地から大量の古銭・陶磁器・石塔などが出土した（図2）。それまで幻の町とされていた草戸千軒が姿をあらわしたのである。

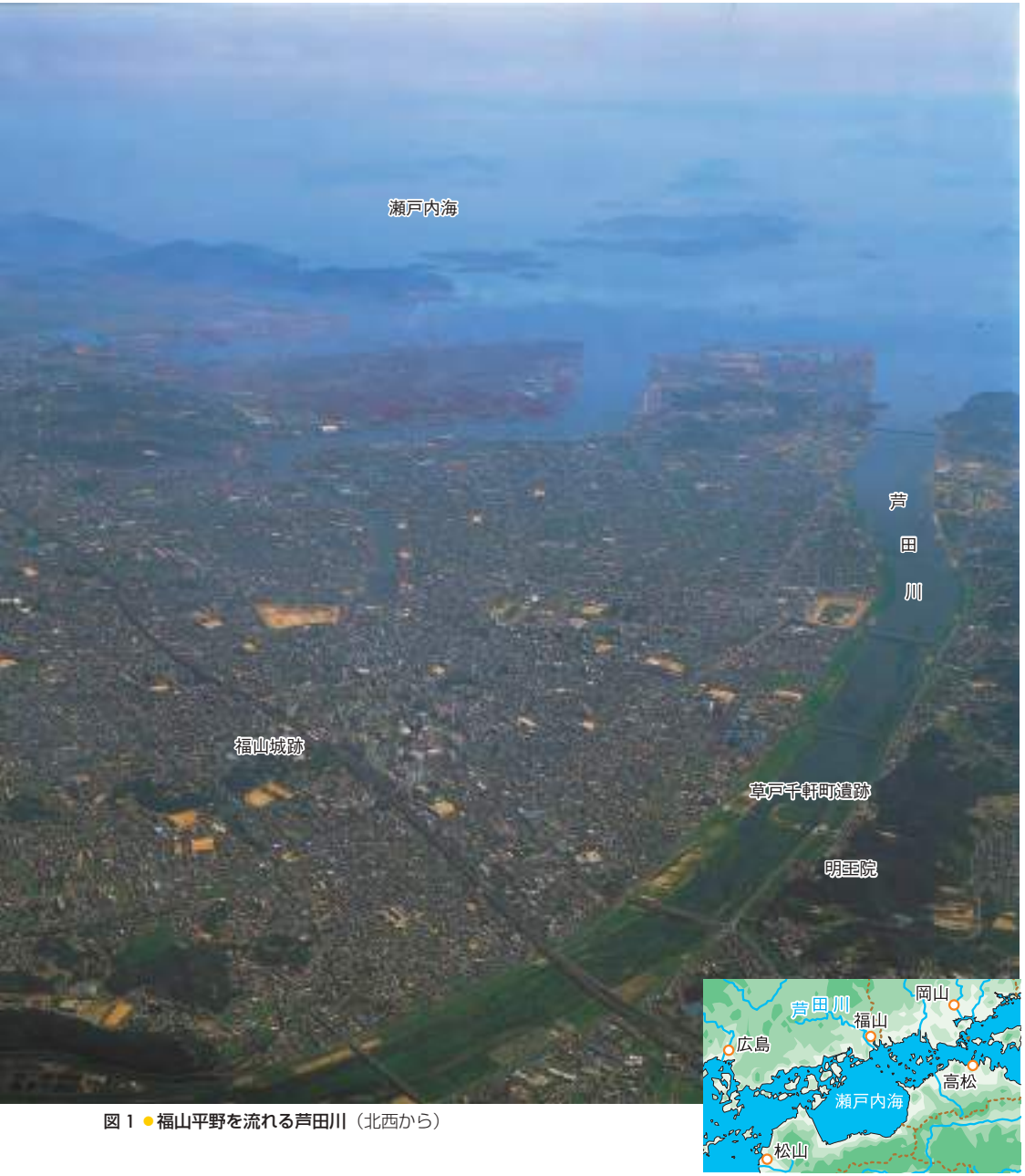

図１●福山平野を流れる芦田川（北西から）

昔、草戸千軒という町があった……

江戸時代の面影は薄れつつあるものの、福山市内には福山城跡をはじめとして、城下町の歴史をしのばせる史跡が散在している。

しかし、城下町建設より前の中世の歴史については記録がほとんど残っていない。そうしたなか、福山地域の歴史を解明するうえでの数少ない手がかりを提供しているのが、江戸時代後期を中心にまとめられたいくつかの地誌である。

「その昔、蘆田郡・安那郡（現在の福山市神辺町から府中市にかけての芦田川中流域）あたりまでが海であった頃、本庄村（現在の福山市北本庄・本庄・南本庄町一帯）の青木が端から五本松のあたり一帯に、草戸千軒という町があった」

一八世紀中頃、宮原直伽によって編纂された『備陽六郡志』（図3）にこのように記されている。これが草戸千軒という町の存在を記したもっとも早い段階の地誌の一つである。『備陽六郡志』にはつづけて、草戸千軒の場所に江戸から町人をよび寄せて新田を開発させたが、一六七三年（寛文一三）の大規模な増水の際に堤防を切って、新田の側に水を逃がしたところ、たちまち水が流れ込み千軒の町家も流れてしまった。それ以降、このあたり一帯には民家を建てることがなくなったとしている。

この記述を根拠に、福山の城下町建設以前に草戸千軒という町が存在し、それが一六七三年の洪水によって消滅したと考えられてきた。洪水に流された中世の町というイメージは、幻の町・草戸千軒を強烈に印象づけるものとして広く浸透している。しかし、ここに示した草戸千軒に関する記述には、いくつか不自然な点がある。

図２●河川改修工事によって出土した石塔
現在は明王院に安置され、福山市の重要文化財となっている。

図３●『備陽六郡志』（財団法人義倉蔵）
草戸村の項に、草戸千軒についての伝説が記されている。

すでに消滅していた伝説の町

まず、草戸千軒の存在した時期である。『備陽六郡志』は、蘆田郡・安那郡までが海であった頃と記すが、完新世（約一万年前以降）において、芦田川中流域にまで海岸線が入り込んでいたことを示す地理学的な証拠は見つかっていない。また、この地域には縄文時代の遺跡も存在することから、少なくとも縄文時代には芦田川の堆積作用によって平野が形成されていたことは確実である。そもそも、そこまで高い海水準を想定すれば、芦田川河口の三角州も水没することになり、そこに町が立地することは不可能である。

『備陽六郡志』よりも早くに成立したとされる『水野記』にも草戸千軒の記載があることから、草戸村にかつて繁栄した町があったことが、江戸時代中頃までに地元で語り伝えられていたことは確かである。しかし、具体的な記録は当時すでに失われており、存在時期についても漠然と昔のことと伝えられ、明確な時期はわからなくなっていたのだろう。

その一方で、福山城下町が成立してからの出来事である新田開発から洪水にかけての記述は具体的である。一連の出来事は『備陽六郡志』が編纂される一〇〇年ほど前のことであり、福山藩領内にもいくつかの記録が残されていた。そのため、記述も具体的になったものと思われる。ここには一六七三年の洪水までに草戸村に新田が開発された経緯が記されているのであるが、江戸時代の城下町のあり方からして、城下の外に位置する新田に町が存在することは、まず考えられない。

宮原直伽は、草戸村の地誌をまとめる際に、記録に記された新田開発から洪水に至る経緯と、そこにかつて町があったという伝説とを重ね合わせて記述してしまったようである。つまり、江戸時代前期の出来事と、それ以前の町の存在とを十分に区別せずに記述してしまったため、一六七三年の洪水で町が消滅したかのような記述ができあがったのである。

郷土史の先駆者・濱本鶴賓

伝説の町となっていた草戸千軒の実像を解明するための研究が本格的にスタートしたのは、大正から昭和初期のことであった。

福山市史編纂主任として福山地域の郷土史の先駆的な研究を進めていた濱本鶴賓は、早くからすぐれた分析力によって近世地誌の矛盾点を指摘していた。たとえば、一九二三年（大正一二）に刊行された『沼隈郡史』では、一六七三年までに草戸新田が開発されているからには、そこに千軒の町屋が存在するはずがなく、もしそのような町があったならば城下に移されたはずであるといった指摘をしている。

一九二六年（大正一五）に始まる芦田川の改修工事をきっかけに、濱本は草戸千軒の研究をさらに進めた。『太平記』『西大寺諸国末寺帳』『西国寺文書』などに草戸千軒の古地名と考えられる記載があることを明らかにするとともに、これらの資料の年代や、出土した古銭の年代、石塔の様式、遺跡に隣接する常福寺（現、明王院）五重塔の建立年代などを検討した。そして、それらがいずれも文明年間（一四六九～一四八七年）以前であることを指摘し、町が消滅したとすれば文明年間をそれほどくだらない時期、具体的には明応から永正年間（一五世紀末～一

六世紀初頭）のことであると結論づけ、一六七三年の洪水による滅亡説をしりぞけている。

濱本が草戸千軒の消滅年代とした一五世紀末から一六世紀初頭という時期は、わたしたちが発掘調査によって導き出した年代とまったく同じであり、その洞察の鋭さには驚かされる。

また、改修工事の前後に出土した多くの遺物の研究も並行して進められた。その代表的なものが、光藤珠夫（みつふじたまお）による陶磁器の研究で、出土陶磁器に国産品のほか、中国・朝鮮の製品が含まれていることや、それらの年代が鎌倉時代に中心があることを論じている。

2　川底の遺跡

明らかになる幻の町

しかし、中世の遺跡を発掘調査によって解明するという考古学的な研究方法が確立していなかったこの時代には、遺跡そのものの発掘調査や保存への動きは見られなかった。遺跡は新たにつけ替えられた芦田川の河川敷に埋もれることになり、川の流れによって遺構や遺物はしだいに崩壊・流出してゆくことになったのである。

戦後になると、歴史研究の方法としての考古学が市民権を得ると同時に、文化財保護の体制も整ってくる。そうしたなか、遺跡の発掘調査に情熱を燃やす人物が現れた。それが、村上正名（むらかみまさな）である。

村上は芦田川から出土する遺物の採集・研究を戦前からつづけ、川底には草戸千軒の町がね

むっていることを確信した。そして濱本がつきとめた幻の町・草戸千軒を発掘調査によって解明し、遺跡の保存をはかることを福山市当局に熱心に働きかけ、ついに一九六一年、芦田川の中州ではじめての発掘調査を実施し、つづく六二年には第二次調査を実施した（図4・5）。

濱本鶴賓の指摘からおよそ三〇年ののち、芦田川の川底に中世の町の跡が埋もれていることが考古学的に確認されたのである。同時に、この遺跡の広がりを明らかにし、保存対策を講じることが必要となった。そこで、一九六五年には文化財保護委員会（現在の文化庁）の補助金による発掘調査を実施することになった。

広島大学教授の松崎寿和（まつざきひさかず）を団長に、広島県・福山市教育委員会共催で実施されたこの調査では、遺構が河川敷内を中心に残り、堤防の外側では残存の可能性が低いことが明らかにされるとともに、石敷道路の三叉路（さんさろ）や、柵で囲まれた区画、鍛冶（かじ）関係の遺構・遺物などが確認された。これによって、幻の町の具体的な姿の解明への期待がいよいよ高まることになったのである。

図４● 1962年に実施された第２次調査

遺跡の破壊

発掘調査によって遺跡の重要性が認識されるようになると同時に、遺跡の保存を左右する重大な問題が浮かび上がってきた。

一九六七年六月に芦田川が一級河川に昇格したため、それにふさわしい河川整備を進める一環として、中州を掘削する計画が建設省（現在の国土交通省）から発表されたのである。大正末期から昭和初期にかけての河川改修工事によってつけ替えられた河川敷には、上流からの土砂の堆積などによって大小の中州が形成されていた。これらの中州が川の流れを妨げ、再び福山市街地に被害をおよぼすおそれがでてきたのである。

中州の掘削は、言うまでもなく遺跡の破壊を意味している。しかし、福山市民の生命と財産を守ることが最優先の課題であること、また中州は河川敷にあるため恒久的な保存対策を講じることはきわめて困難であるといった理由から、最終的には遺跡の緊急調査を実施することで問題の解決がはかられることになった。

さらに、一九七一年には新たな問題に直面することになった。建設省はこの年、芦田川に河口堰（こうぜき）を建設する計画を発表したのである。これは、福山市の工業都市化にともなう工業用水の確保に大きな目的があった。河口堰が完成すると、河口湖内にある遺跡包蔵中州近辺の水位は標高二メートルとなり、遺跡が水没、あるいは水没しなくても発掘調査が不可能になることが予想された。水位の上昇により遺跡の流出・崩壊が急速に進み、年間二、三カ月の調査では対応が手遅れになる可能性も考えられるようになったのである。

図５●芦田川のなかの草戸千軒町遺跡（南東から）

３　中州を掘りあげる

調査体制の整備

さし迫る状況に、大規模で継続的な調査に対応できる調査体制が組織されることになった。そして一九七三年、広島県教育委員会は福山市花園町の旧保健所の庁舎を利用して、「草戸千軒町遺跡調査所」を設置し、大規模遺跡の組織的な調査の経験をもつ松下正司（まつしたまさし）を文化庁から所長として招いた。こうして、草戸千軒町遺跡の本格的な発掘調査と研究のための事業がスタートすることになったのである（図６）。

発掘調査を予定する中州の面積は、六万七〇〇〇平方メートルにおよぶが、この広い中州を一度に掘り広げたのでは綿密な調査はできない。そこで、年度ごとに四〇〇〇平方メートルの